

語られたアドラー心理学

尾中映里 (高知)

要旨

キーワード :

1. はじめに

2007 年、第 24 回日本アドラー心理学総会における井原文子氏の宿題研究発表「自助グループの個性と構造」を聞いて、私はその研究方法に興味を持った。それまで、私が知っている研究方法といえば、まずある予測のもとに仮説を立て、それを立証する方法を考えて、実際に検証し、その結果から、成果や課題を追求していくというものであった。しかし、井原氏の発表は、それとはあまりにも違っている研究方法を用いた研究発表だったからである。その研究方法は、井原氏の論文「自助グループの個性と構造」(1)の中に、次のように述べられている。

『本論文は、予測や仮説がまずあって、現場を論ずる還元主義的方法ではなく、現場に赴いて観察した出来事の中から法則を見つけ出す構造主義的方法を試みています。構造主義的な研究方法とは、1) 現場に出かけて観察する。2) 観察したものの中に共通する構造を見つけ出す、3) 見つけ出した結果を絶対視しない、ことだといえます。』

そして、医学の領域では、NBM (Narrative Based Medicine) ということが話題になっていることを野田俊作先生から聞く機会があった。野田先生からは、「これまでの医学は、医者側の側がすべてを決めてきました。たとえばある子どものことを『ADHD』だとか『アスペルガー症候群』だとかいう言葉で医者が語ります。子ども自身も親も教師もその語りを受け入れて、そういう世界が作られます。しかし、実は医者の語りは事実でも真実でもなくて、ただの語り (story) であるにすぎません。ところが、それが現実をどんどん作っていきます。このことにはよい面もありますが、危険な面もあります。そこで、医者の語りを離れて、患者自身や家族の語りをちゃんと聴いてみようというのが、NBM (語りに根ざした医学) の出発点です。」ということを知った。それをきっかけにして、私は、NBMに興味を持った。

このように、構造主義的な研究方法を用い、医学の領域で使用されているNBM (Narrative Based Medicine) の考え方をアドラー心理学でも活用することはできないかということが本研究の出発点である。医学に相当するような「基本前提」だとか「ライフスタイル」だとかそういう公式のアドラー心理学の語りというものがある一方に、もう一方に、それとは一応切り離されて、一人一人が自分なりに理解しているアドラー心理学もあり、「私にとってアドラーとは」とか「アドラーを暮らす」ということを語れると思ったのである。

そこで、アドラー心理学の学習者に対して、「アドラー心理学とは何か」ということを社会的ないし人類学的に調査して、日本のアドレリアンの社会集団の中で、どのようにアドラー心理学が受けとられているかを調査研究することとした。

「社会的ないし人類学的に調査する」というのは、次のようなことを意味する。

- (1)現場に行って人々から実際に聞きとったデータを元にする。
- (2)多くの人々の平均的傾向を見るのではなくて、一人一人の個性的かたよりを見る。
- (3)そこからひるがえって、日本のアドレリアンの社会集団の中でのアドラー心理学の受けとられ方を考える。

なお、本論文は、2009年10月16日から10月18日まで高知市において開催された、第26回日本アドラー心理学会総会において宿題研究発表をしたものを、加筆してまとめたものである。

2. 研究対象

研究の対象は、日本アドラー心理学会の会員であり、ある程度アドラー心理学学習歴の長い人で、私が直接会って話を聞くことが可能な人である。ここで言う、「アドラー心理学歴の長い」というのは、あくまでも対象者の認知であり、対象者が半年でも長いと思っておれば長いことになるし、10年でも短いと思っておれば短いということになるということである。

また、話を聞かせていただくときに、次のようなことを事前に文書あるいは口答で説明し、聞き取り調査への承諾が得られた人である。

2007年4月から2009年8月までの間に33名に話を伺ったが、本論文の研究対象は、その中の

アドラー心理学を学ばれている方に対するインタビュー調査について

こんにちは。高知の尾中映里と申します。

この研究は、野田俊作指導者アドバイスのもと取り組んでいるものです。

内容は、基本前提であるとかライフスタイルなどのように公式のアドラー心理学についての語りというのがありますが、一方では、一人一人の語りというものがあるということを想定し、日本でアドラー心理学を学ばれている人に対して行い、その方がどのようなことを語るのかを聞き取り調査をして、それをまとめることを目的としています。

ある程度アドラー心理学を学ばれた方にアドラー心理学について語っていただいて、どういったことを語られたのかをまとめて、数値化をし、統計的に処理をします。(ある程度アドラー心理学を学ばれた方とは、学ばれた時間の長さではなくて、その方の認知でよいのです。例えば1ヵ月でも数年でも。)

インタビュー時間は、30分から1時間ぐらいです。話す方がその方の興味で自由に話していただくために、聞き手(尾中)が積極的に質問をしません。例えば、「アドラー心理学を学んでどうでしたか?」とか「あなたにとってアドラー心理学とは?」など大きく開いた質問をさせていただきます。

後でテープおこしをする関係で、インタビュー中は、録音をお願いします。録音したものは、この研究以外には使用しません。また、統計的に処理をしますので、個人名などを出すことはありません。

調査結果は、第26回日本アドラー心理学会総会 高知総会において、宿題報告をすることになっています。

お忙しいところ申し訳ありませんが、ご協力よろしく申し上げます。

30名とする。

3. 研究方法

(1). 面接方法

この研究を進めるにあたって最初に行ったことは、面接方法を確立することである。アドラー心理学学習者に対してどのように問かければ、その人がある程度自由に語ってもらうことができるのかということを考えた。まず、1対1の個別面接で30分から1時間の間で行うことにした。1対1の個別面接にしたのは、第3者がいるとその人の語りが変わってくるからで、時間については、あまり短いと後での分析が難しくなると考えたからである。

次に、どのような質問をするかである。語ってもらうためには、質問をしなければならないが、たくさん質問をすれば、聴き手（私）の興味・関心などの認知が入ったインタビューとなる。あまり少なければ、アドラー心理学学習者がどのように答えたらいいかわからずに、30分から1時間のインタビューが不可能になってしまうということが考えられた。そこで、私は「聴き手」という立場に立って、あまり積極的な質問をせず、漠然とした開いた質問、次のような3つの質問を試みることにした。その質問は、「アドラー心理学を学んでどうですか?」、「どんな風に暮らしていますか?」、「あなたにとってアドラー心理学とはなんですか?」である。これは、人類学者が現地人のインフォーマント（情報提供者）から暮らしについて聴きとるイメージである。

(2). 集計方法

集計方法について順に述べていく。まず、1対1で個別に行った面接を録音して、後でテープ起こしを行った。そして、その中から、次の条件にあてはまる文「有意義文」を抽出した。「有意義文」とは、私はアドラー心理学を／どんな《相手》にたいし／どんな《機能》について／どんな《要素》を／《どのように》使い／どんな《結果》になった、という文のことである。

《相手》については、《自分》・《家族》・《その他の人々》という3分類で集計した。複数の項目を含んでいる場合には集計に含めなかった。

《機能》については《思考》・《感情》・《行為》という3分類で集計した。複数の項目を含んでいる場合も集計に含めた。

《要素》については《技法》・《理論》・《思想》という3分類で集計した。複数の項目を含んでいる場合も集計に含めた。

このような構文にまとめることができない文については、「無意義文」として、今回の検討の対象からはずすこととした。以上のようにして得られた「有意義文」は、番号をつけて次のようにエクセルの表にまとめた。

	相手	機能	要素	どのように	結果
01	その他の人々	思考・感情 ・行為	技法・理論・ 思想		対人関係に広 く影響した

表1 基礎データ表の例

このようなエクセルの表にまとめるときに、《相手》・《機能》・《要素》の3つの項の分類は、元の文を読んで直接読みとれない場合にも、私が解釈してあてはまると思われるものを各項に入れた。しかし、どうしても解釈が無理な場合は、空白のままにしておくことにした。《どのように》と《結果》についてはインフォーマントの言葉を自由記述的にそのまま使用した。

さらに、エクセルの表を作成した後、統計処理を行った。このように統計処理を行ったのは、インフォーマントから得られた文章を感覚的に理解するだけでなく、なんらかの客観的な方法で計測できないかと考えたからである。統計処理をしたものは、図1から図3で示すようにインフォーマント、個人の分布グラフとなって示されている。絶対値にはあまり意味がなくて、全体のパターンを見るようになっており、有意義発言数に対する比率で表している。

図1はAさんの《相手》に関するグラフである。《自分》0.53、《家族》0.28、《人々》0.19である。

図2はAさんの《機能》に関するグラフである。《思考》0.39、《感情》0.18、《行為》0.43である。

図3はAさんの《要素》に関するグラフである。《技法》0.27、《理論》0.29、《思想》0.44である。

この図1から図3で示すように、Aさんは《自分》に対して《行為》について《思想》を使っている傾向が強いということが分かる。

このようにして一人一人の傾向を数値に表すことにより、個人の傾向を明らかにすることができた。つまり、「〇〇さんはどんな相手に対して、どんなことについて、どんなことを使っている傾向である」ということが分かるのである。インタビューをしたり、話をするといろいろと相手のことについて、感じたり、気がついたりすることがあるが、それは、ただ単にその人の感覚や直感だけある。このように、数値としてグラフに表されると、目に見えてその傾向が分かるのである。私がインタビューして感じた感覚だけではないのである。

(3). 研究方法論の確立

前述のような面接方法、集計方法を用いて、研究方法論を確立するための次のような予備的研究を行った。まず、1) 現場に行って人々から実際に聞きとったデータを元にする、2) 多くの人々の平均的傾向を見るのではなくて、一人一人の个性的かたよりを見る、ということをして2007年4月から2008年9月末までの間に13名のインフォーマントから聞き取り調査を行った。その中から、初期に聞き取り調査を行った3名のインフォーマントAさん、Bさん、Cさんの結果から集計法などについて検討を加えた。その聞き取り調査の結果は、図4から図6の

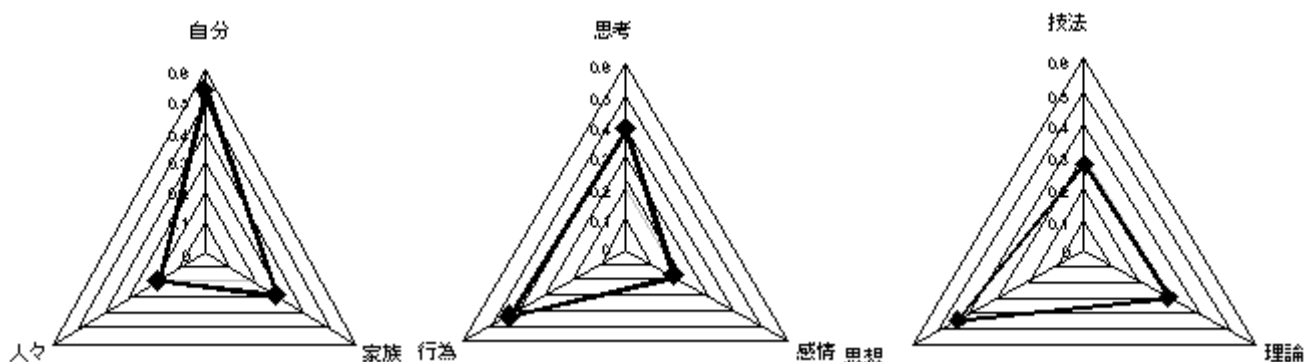


図2 Aさんの《機能》の分布 図3 Aさんの《要素》の分布 図3 Aさんの《要素》の分布

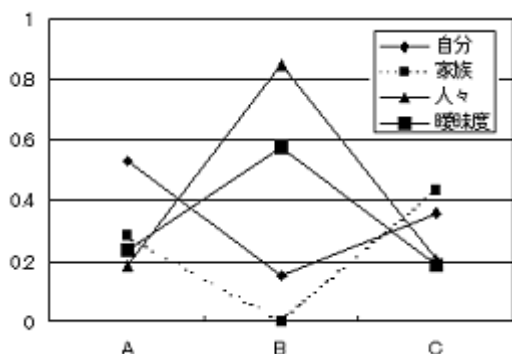


図4 《相手》の分布

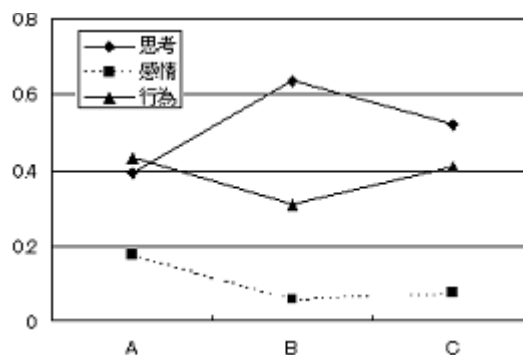


図5 《機能》の分布

ようになっており、それぞれにその人の語りがあり、一人一人違っているものであった。また、この結果と日常での付き合いの中で、私が感じたり思ったりしていることと特徴が合致したことから、この集計法は、アドラー心理学の個性的理解を描き出す上で、有効な方法ではないかと思われた。

そこで、この研究方法を使い、2008年10月から2009年8月まで現場に行き、多くのアドラー心理学学習者から実際に聞きとったデータを元にして、一人一人の個性的かたよりを見ながら、そこからひるがえって、日本のアドレリアンの社会集団の中でのアドラー心理学の受けとられ方を考えてさらに考察を深めていこうと考えたのである。

① 図4 《相手》の分布について

図4のグラフは横軸に「被験者」を入れて作ったものである。「曖昧度」とは、全発言数に占める《相手》と《自分以外》の割合を示したもので、多いほど、3つの分類の複数を同時に《相手》に指定していることを示している。

Aさんは、アドラー心理学を《自分》に一番よく使い、次に、《自分》に使う半数ぐらいの割合で《家族》に対して使っている。

Bさんは、《人々》に対して一番よく使っているが、《家族》については0となっている。

Cさんは、《家族》に一番よく使い、続いて、《自分》に対しても0.82という高い数字を示している。「曖昧度」が一番高いのはBさんであるということが分かる。

② 図5 《機能》の分布について

図5では、Aさんは、アドラー心理学を《行為》について一番よく使い、次に、《行為》とほぼ同じぐらいの割合で《思考》について使っている。

Bさんは、《思考》については0.6を超えて一番よく使い、《行為》については0.3となっている。

Cさんは、《思考》、《行為》が0.4を超えていて割りと使っているといえる。

《感情》については、0.05から0.17というように低くなっており、あまり《感情》を使うことがないようである。

③ 図6 《要素》の分布について

図6では、Aさんは、アドラー心理学について《思想》を一番よく使い、次に、《理論》と《技法》を0.3ぐらいのほぼ同じぐらいの割合で使っている。

Bさんは、《技法》を0.5ぐらいで一番よく使い、《理論》と《思想》については0.28、0.24

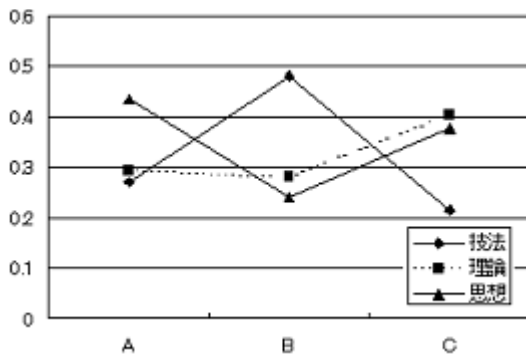


図6 《要素》の分布

となっている。

Cさんは、《理論》を0.4と一番よく使い、ほぼ同じぐらいの割合で《思想》を使っている。《技法》については、0.2ぐらいとなっている。

4. 結果

個人グラフを作成後、別の方法で統計処理を行った。図7のように、30名の結果を偏差値のグラフで表した。これは、 $\text{偏差値} = (\text{値} - \text{平均値}) / \text{標準偏差}$ で計算をしたもので、 ± 1 標準偏差内に68%ほど、 ± 2 標準偏差内に95%ほどの人が入ることになっている。このグラフから、30名のインフォーマント中で自分がどの位置に位置しているのかが、分かるようになっている。《機能》、《要素》についても、《相手》の分布と同様にして、統計処理を行った。

さらに、3つの《要素》を尺度ごとに、統計処理を行った。《相手》については、《自分》・《家族》・《その他の人々》という3分類で、《機能》については《思考》・《感情》・《行為》という3分類で、《要素》については《技法》・《理論》・《思想》という3分類で集計したものを要素ごとに特徴のあるインフォーマントを挙げながら、結果を述べる。

(1). 《相手》の分布結果

図7はAさんからDDさんまで、《自分》、《家族》、《人々》に対してそれぞれに偏差値で表した《相手》の分布結果グラフである。

①. 《自分》に対する分布結果

図8は《自分》に対する分布の偏差値結果である。2.08から-1.80の範囲にある。 ± 1 の範囲に70%の人が入っている。+1以上の人はEさん、Qさん、Pさん、Dさん、AAさんである。-1以下の人は、Bさん、Vさん、Tさん、Oさんである。+1以上の高い値を示していて、なおかつ、他の尺度で-1以下の低い値を示しているEさん、Qさんは「自分優先」と判断できる。

a. 《自分》優先

個人の分布グラフから見てみる。図9はEさん、図10はQさんの《相手》の分布グラフである。《自分》に対してよく使っているが、《その他人々》に対して少しの割合で使い、

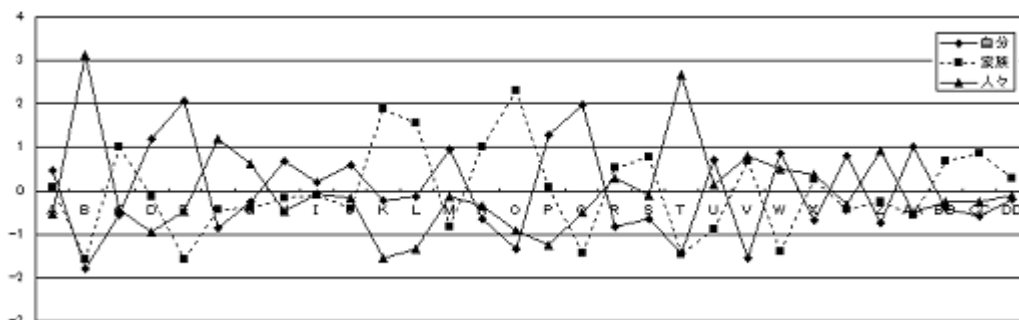


図7 《相手》の分布 偏差値結果

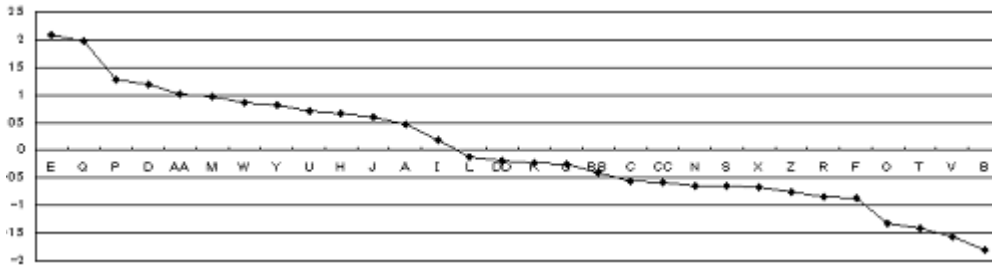


図8 《自分》に対する分布 偏差値結果

《家族》に対しては、0または0.02となっていて、全く使っていない、または、ほとんど使っていないとなっている。このように、《自分》に対して、語る割合が多く、なおかつ、他のものに対して語る割合が低いものを「自分優先」ということができる。

Eさんの語りの中でも、自分は「知らないよりも楽に生きているというか、力を抜いて生きているかもしれないなあという感じがある。」とか、「全然それまでの自分とは全然違う生き方をしている。」というような語りがあった。

Qさんも、「すごくものの考え方が受け入れられるようになった。自分の考え方とか、こうあるべきとか押し付けることがなくなった。」と語っていて、自分のことについてたくさん語っている。

②. 《家族》に対する分布結果

図11は、《家族》に対する分布の偏差値結果である。2.32から-1.58の範囲にある。±1の範囲に74%の人が入っている。+1以上の人はOさん、Kさん、Lさん、Nさん、Cさんである。-1以下の人は、Eさん、Bさん、Tさん、Qさん、Wさんである。+1以上の高い値を示していて、なおかつ、他の尺度で-1以下の低い値を示しているOさん、Kさん、Lさんは、「家族優先」と判断できる。

b. 《家族》優先

個人の分布グラフから見てみる。図12はOさん、図13はKさん、図14はLさんの《相手》の分布グラフである。このように、《家族》に対して語る割合が多く、なおかつ、他のものに対して語る割合が低いものを「家族優先」ということができる。

語りの中では、Oさんは、「息子とのかかわりの中で学んでいきたいと思ってきたんです。息子とのかかわりが大きく変わってきたんです。」「彼を一人の人としてまず認める

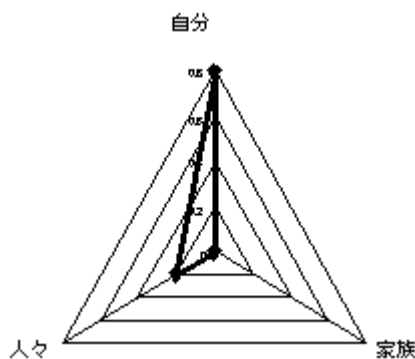


図9 Eさんの《相手》の分布

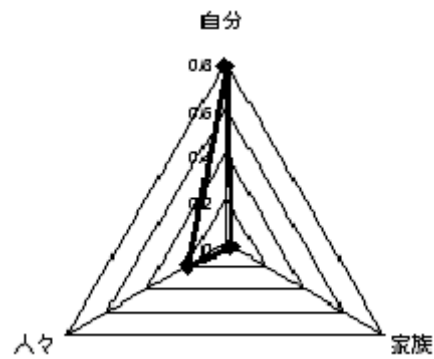


図10 Qさんの《相手》の分布

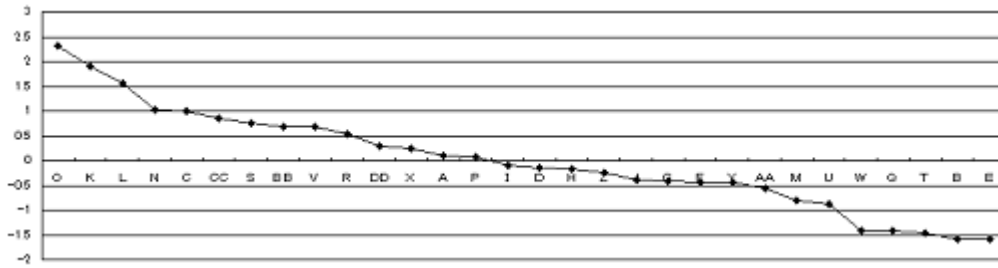


図 11 《家族》に対するの分布 偏差値結果

というのが、自分にとって大きな1つのものだった。」と語っている。

Kさんは、「一緒に住もうと思えたのは、アドラー心理学のおかげです。なんとかやっていけると思えたので、同じ敷地内でもいいよというように話しました。」と語っている。

Lさんは、「子どもを預けて、どこかアドラーの行事に行くといったりするときに、自分の両親とかもここに登場するわけで、その調整とかするときも、相手の都合とかも聴きながら、じゃあこの期間だけお願いしますとか、ものすごい調整をする。」と語っている。

このように、《家族》のことについて、たくさんの語りがあった。

③. 《人々》に対するの分布結果

図 15 は、《人々》に対するの分布の偏差値結果である。3.12 から -1.55 の範囲にある。±1 の範囲に 80 % の人が入っている。+1 以上の人は、B さん、T さん、F さんである。-1 以下の人は、K さん、L さん、P さんである。+1 以上の高い値を示していて、なおかつ、他の尺度で -1 以下の低い値を示している B さん、T さんは、「人々優先」だと判断できる。

c. 《人々》優先

個人の分布グラフ結果から見てみる。図 16 は B さん、図 17 は T さんの《相手》の分布グラフである。2 つのグラフは同じように《人々》の方向に三角形が大きく伸びている特徴的なグラフとなっている。この 2 人は、《人々》に対して、大変良く使っているが、自分に対しては、少しの割合で使い、《家族》に対してはほとんど使っていないとなっている。このように、《人々》に対して語る割合が多くて、なおかつ、他のものに対して語る割合が低いものを「人々優先」ということができる。

B さんは、《人々》に対してアドラー心理学を使うと「今、起こっている現象、事柄と感情とを分けて考えるので、感情を別の次元に置いてと言うか、一回、排除して、事柄だ

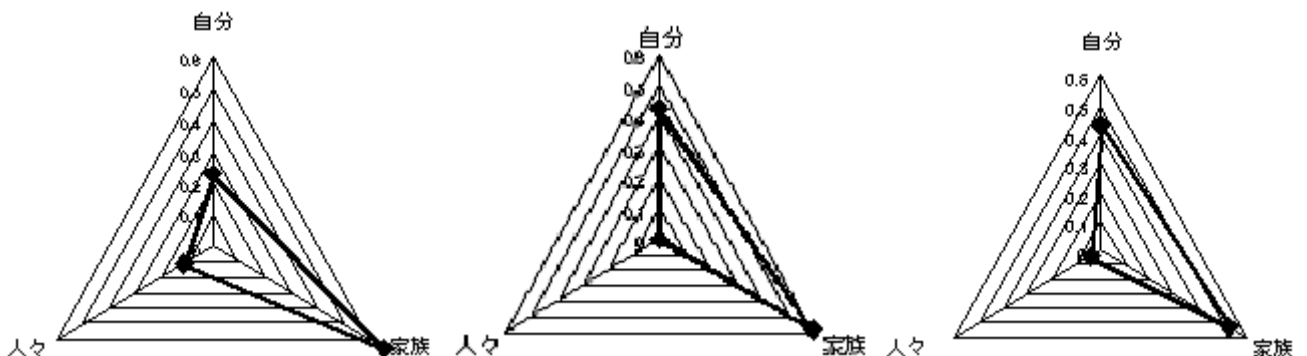


図 12 O さんの《相手》の分布 図 13 K さんの《相手》の分布 図 14 L さんの《相手》の分布

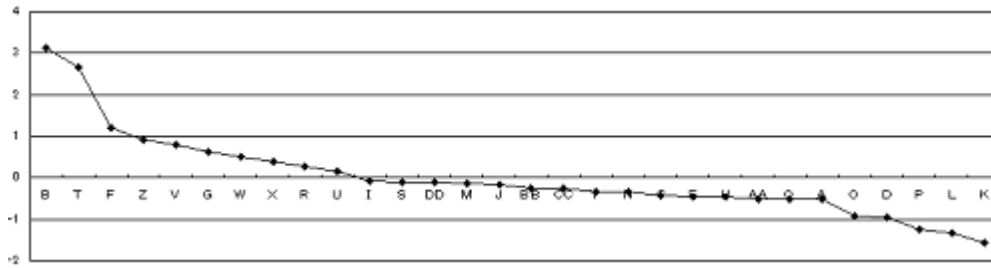


図 15 《人々》に対するの分布 偏差値結果

けを考え直して、どうすべきか、次どうするかとか、これで終わりにするとかというふうに、けりをつけやすくなったという感じです。」と語っている。

Tさんは、「今ある状況をじゃあどうするか、っていうのがすごく考えられるようになった。建設的に。あれがいかんからこうやとか、だいぶそれがなくなってきた、じゃあ、今どうするの、って考えられるようになった。」と語っている。

(2). 《機能》の分布結果

図 18 はAさんからDDさんまで、《思考》、《感情》、《行為》に対して、それぞれに偏差値で表した《機能》の分布結果グラフである。

①. 《思考》の《機能》に対するの分布結果

図 19 は、《思考》の《機能》に対するの分布偏差値結果である。8.29 から - 6.23 と広範囲にわたっている。±2の範囲に入っているのは、57 %である。《思考》の《機能》を使っている人はかなり高い数値になっている。+2以上の人は、Bさん、Qさん、Cさん、Tさん、Yさん、Zさん、Xさんである。-2以下の人は、BBさん、Nさん、Rさん、Fさん、AAさん、Uさんである。+2以上の高い値を示していて、なおかつ、他の尺度で-2以下の低い値を示しているBさん、Qさん、Cさん、Yさん、Zさん、Xさんは、「思考優先」と判断できる。

a. 《思考》優先

個人の分布グラフから見てみる。図 20 はBさん、図 21 はQさんの《機能》の分布グラフ

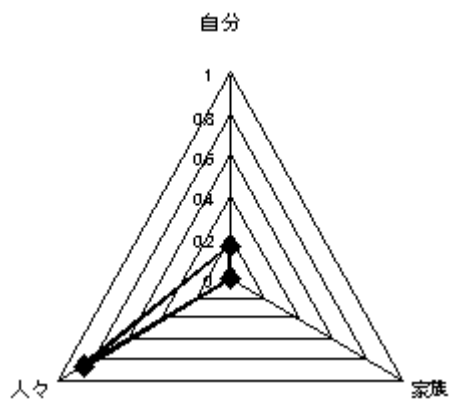


図 16 Bさんの《相手》の分布



図 17 Tさんの《相手》の分布

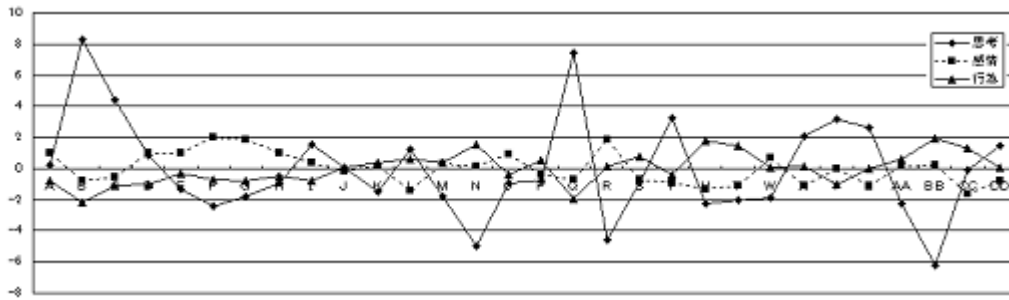


図18 《機能》の分布 偏差値結果

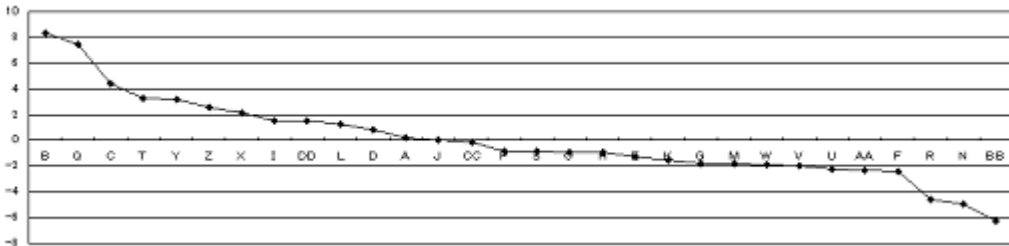


図19 《思考》の《機能》に対する分布 偏差値結果

フである。BさんとQさんは、《思考》の《機能》について一番良く使い、次に《行為》の《機能》を使い、《感情》の《機能》はほとんど使っていないという傾向である。このように、《思考》の《機能》について一番良く使い、なおかつ、他のものについて使う割合が低いものを「思考優先」ということができる。

Bさんは、《思考》について「いったいその人が何を思って、何を考えてそうしたのかなとか、何が目的だったのかなとかということを見ると、事柄が組み立てやすくなった。」と語っている。

Qさんも、「アドラーの思想に基づいて立ち返らなくてはならない。さらに立ち返って、どうすればいいとか考えると、一番安全に人間らしく生きられるというのはある。そんなふうに愛用していますね。」と語っている。

このように頭の中で、たくさん考えていることを表す言葉がインタビューの中には、ちりばめられていた。

②. 《感情》の《機能》に対する分布結果

図 22 は《感情》の《機能》に対する分布の偏差値結果である。1.98 から - 1.64 の範囲

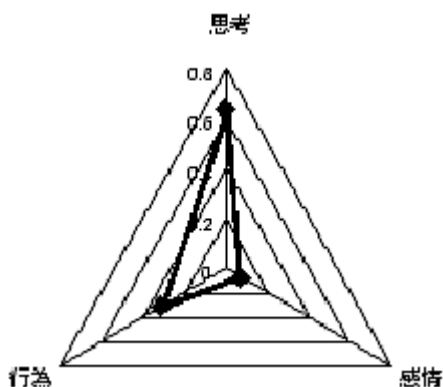


図20 Bさんの《機能》の分布

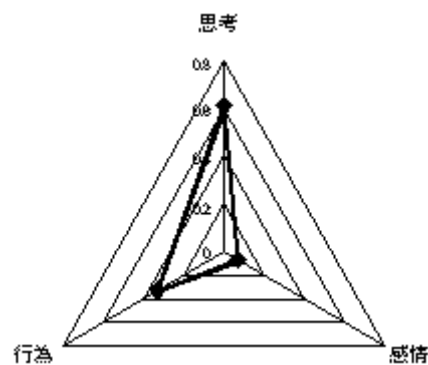


図21 Qさんの《機能》の分布

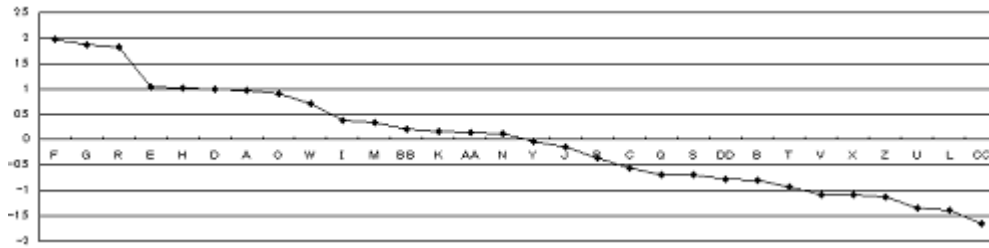


図22 《感情》の《機能》に対する分布 偏差値結果

にある。+1以上の方は、Fさん、Gさん、Rさん、Eさん、Hさん、Dさんである。-1以下の人は、CCさん、Lさん、Uさん、Zさん、Xさん、Vさんである。+1以上の高い値を示している、なおかつ、他の尺度で-1以下の低い値を示しているFさん、Rさん、Dさんは、「感情優先」だと判断できる。

b. 《感情》優先

個人の分布グラフから見てみる。図23はFさん、図24はRさん、図25はDさんの《機能》の分布グラフである。Rさん、Fさんは、感情優先なのに、個人の《機能》の分布グラフでは、《行為》が一番高くなっている。Dさんは、《行為》と《思考》が同じ値になっていて、逆に《感情》の値が低くなっている。これは、もともと、《感情》の《機能》そのものの値が他の《機能》の値に比べて低いうえに、その人々中での偏差値によって比較し抽出したものだからである。つまり、《感情》だけで全員を比較すると、その中では高い値をとっている人であるが、個人の中で見ると《感情》の比重が低くなっているということである。したがって、個人のグラフとしてみた場合は、「感情優先」であるが、そこが大きく突き出しているグラフにはなっていないのである。

それぞれの語りでは、Fさんは、「その人の行動とか、感情の動きとかを確認するともものすごく理論通りに現象が起きているというように思えて、すごく面白かった。」と、Rさんは、「その感情の目的は何かという、目的論を考えると、こっちも冷静になれるかなあ。」と。また、Dさんは、「やっている、だんだん楽しくなってくる。これをやっていて全然、不快じゃない。」と語っていて、単独に感情のことについて語っているというよりは、複数の尺度と重なって語っている場合の語りが多かった。

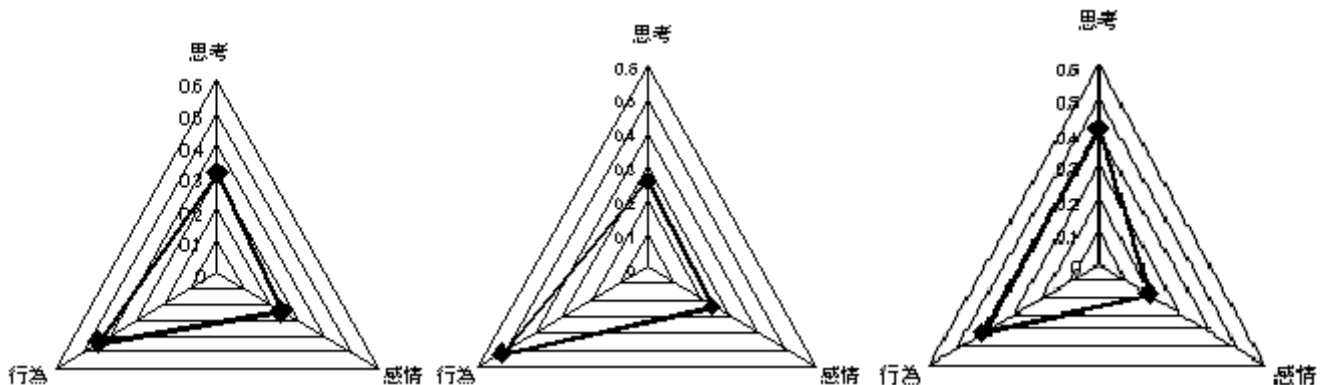


図23 Fさんの《機能》の分布 図24 Rさんの《機能》の分布 図25 Dさんの《機能》の分布

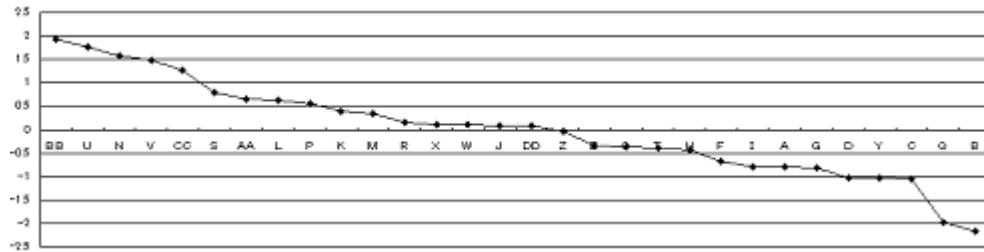


図26 《行為》の《機能》に対するの分布 偏差値結果

③. 《行為》の《機能》に対するの分布結果

図 26 は《行為》の《機能》に対するの分布偏差値結果である。1.92 から - 2.17 の範囲にある。+ 1 以上の人は、BB さん、U さん、N さん、V さん、CC さんである。- 1 以下の人は、B さん、Q さん、C さん、Y さん、D さんである。+ 1 以上の高い値を示している、なおかつ、他の尺度で - 1 以下の低い値を示している BB さん、U さん、N さん、V さん、CC さんは、「行為優先」だと判断できる。

c. 《行為》優先

個人の分布グラフから見てみる。図 27 は N さん、図 28 は BB さんの《機能》のグラフである。このグラフでも、《行為》の《機能》について高い値をしめしており、なおかつ、他の《機能》について使う割合が低くなっているので、「行為優先」ということができる。

語りでは、N さんは、「本当に時間をかけて『パセージ』をやっていたら、別にあの子は嫌なことをやっていたんじゃないんだと、ふと、どこかで思い、それに気がついたら、全部がばたばた、って変わって行って、私が嫌なだけだったんだって。」と語り、

BB さんは「娘も勇気づけることができたし、なんとか家族関係を良くすることもできたし、あと、娘が頼ったときには、頼りになる人間関係もできてきたかなと。」と語っている。

(3). 《要素》の分布結果

図 29 は A さんから DD さんまで、《技法》、《理論》、《思想》に対してそれぞれに偏差値で表した《要素》の分布グラフである。

①. 《技法》に対するの分布結果

図 30 は《技法》に対するの分布の偏差値結果である。2.82 から - 1.94 の範囲にある。+

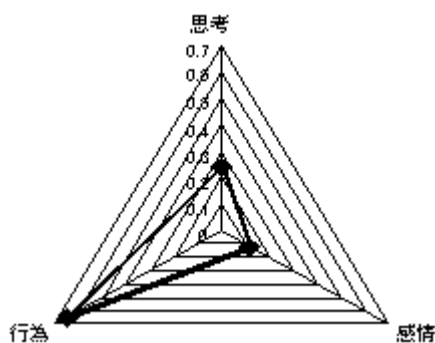


図27 N さんの《機能》の分析

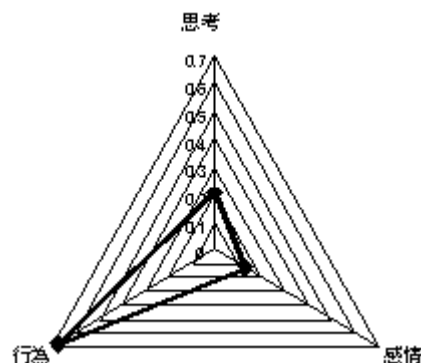


図28 BB さんの《機能》の分析

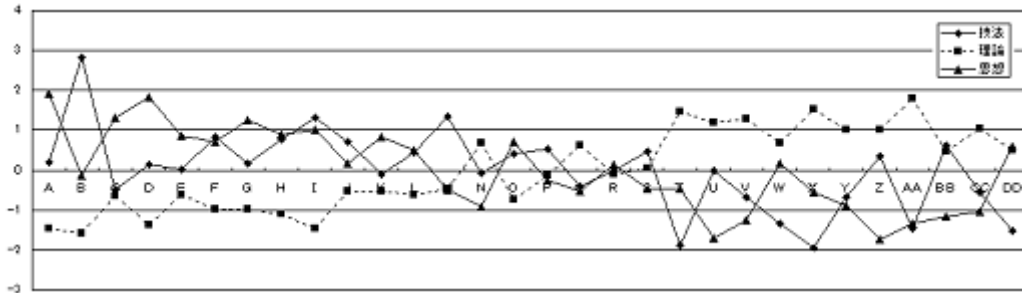


図29 《要素》の分布 偏差値結果

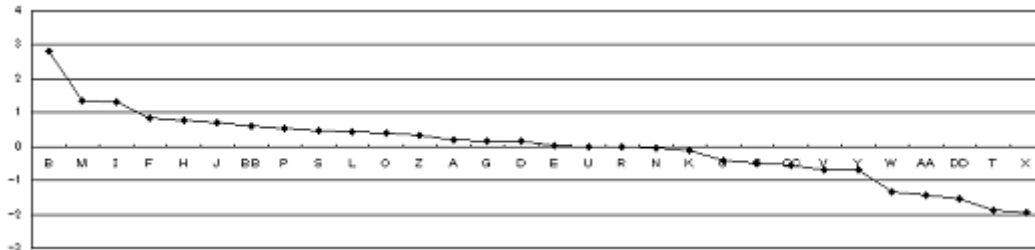


図30 《技法》に対する分布

1以上の方は、Bさん、Mさん、Iさんである。-1以下の人は、Xさん、Tさん、DDさん、AAさん、Wさんである。+1以上の高い値を示していて、なおかつ、他の尺度で-1以下の低い値を示しているBさん、Iさんは、「技法優先」だと判断できる。

a. 《技法》優先

個人の分布グラフから見てみる。図31はBさん、図32はIさんの《要素》の分布グラフである。このグラフでも、《技法》の値が高く、なおかつ、他のものについて使う割合が低いので、「技法優先」ということができる。

語りでは、Bさんは、「技法を使うと、分けて考えてもらおうと問題が整理しやすくなった。」と語っている。これは課題の分離の内容について語っている。

Iさんは、「できるだけ保健室に来た子どもとはおしゃべりしましょう。」と、どのように聞くかということについて、語っている。

②. 《理論》に対する分布結果

図33は《理論》に対する分布の偏差値結果である。1.79から-1.56の範囲にある。+1以上の方は、AAさん、Xさん、Tさん、Vさん、Uさん、CCさん、Yさん、Zさんで

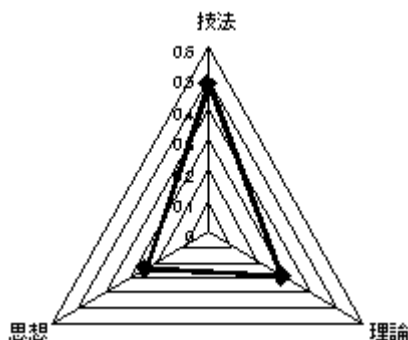


図31 Bさんの《要素》の分布

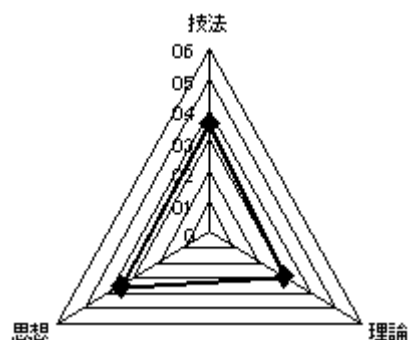


図32 Iさんの《要素》の分布

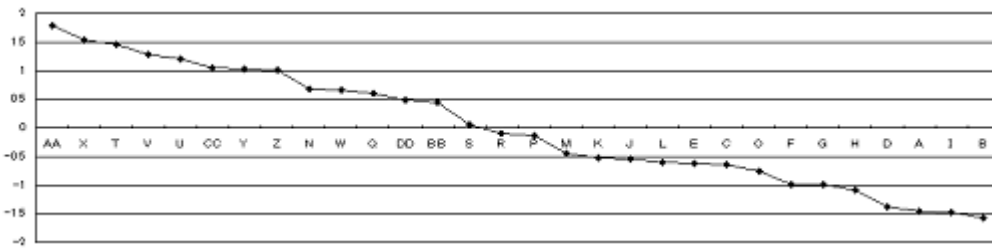


図33 《理論》に対する分布 偏差値結果

ある。-1以下の人は、Bさん、Iさん、Aさん、Dさん、Hさんである。+1以上の高い値を示していて、なおかつ、他の尺度で-1以下の低い値を示しているAAさん、Xさん、Tさん、Vさん、Uさん、Zさんは、「理論優先」と判断できる。

b. 《理論》優先

個人の分布グラフから見てみる。図34はTさん、図35はXさんの《要素》の分布グラフである。このように、《理論》の値が高く、なおかつ、他のものの値が低いものを「理論優先」ということができる。

語りでは、Tさんは、「仲良くするためには、じゃあこんなことをやろう。目的論というのはすごく、後ろ向きやった自分に前を向かしてくるようになった。」と、Xさんは、「感想と付き合うんじゃないくて、目の前の人と付き合うというのは、すごく暮らし方の中では、意味がある。どう暮らしているかなあって」と「対人関係論」に関することを語っている。

また、AAさんは、「このことが起こったら、こうしよう、ああしようというふうに考える必要がないなあ。何かがあれば誰かが協力してくれるだろうという、というような気持ちがある。」と語っている。Vさんは、「自分のやっていることに責任を持つ。自分のやっていることを自分で決めている。」と、Uさんは、「アドラー心理学を知ったら、人のせいに出来ん。」と、Zさんは、「自分自身が選んで、やっているのは私自身やなあと思ったら、私は、なんかもう少し大人になりたいなというところはあるかな。」と語っている。

このように、「個人の主体性」、「全体論」、「社会統合論」、「目的論」、「対人関係論」というアドラー心理学の基本前提は、それぞれの語りの中で語られている。

③. 《思想》に対する分布結果

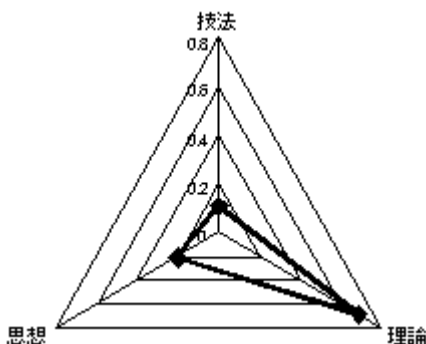


図31 Bさんの《要素》の分布

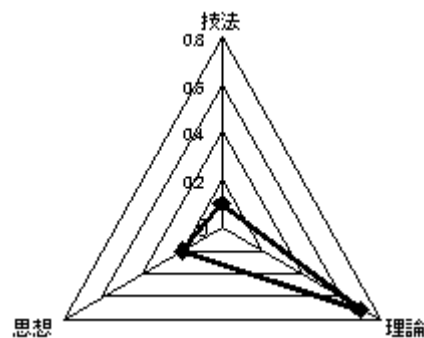


図32 Iさんの《要素》の分布

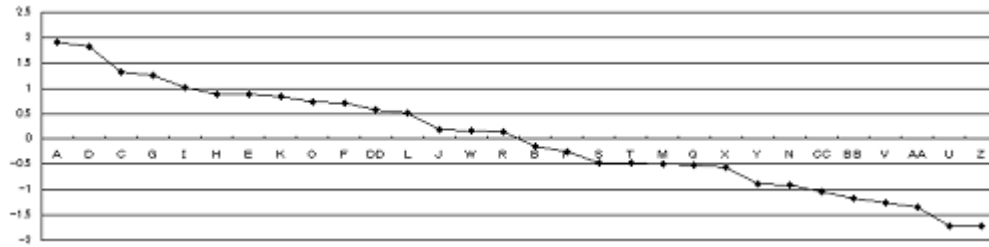


図36 《思想》に対する分布 偏差値結果

図 36 は《思想》に対する分布の偏差値結果である。1.91 から - 1.72 の範囲にある。+ 1 以上の人は、Aさん、Dさん、Cさん、Gさん、Iさんである。- 1 以下の人は、Zさん、Uさん、Vさん、AAさん、BBさん、CCさんである。+ 1 以上の高い値を示している、なおかつ、他の尺度でマイナス 1 以下の低い値を示している Aさん、Dさん、Iさんは、「思想優先」だと判断できる。

c. 《思想》優先

個人の分布グラフから見てみる。図 37 は Aさん、図 38 は Dさんの《要素》の分布グラフである。このように、《思想》の値が高くなっており、なおかつ、他のものの値が低くなっているのを「思想優先」ということができる。また、Iさんも「思想優先」になるが、このほかにも Iさんは、「技法優先」にも入っている。

語りから見ると、Aさんは、「自分のやることはすべて繋がっているし、今までのこととも繋がっているし、これからのことも繋がっていくし、すごくそう思います。そんなことを意識するようになりました。」と語っている。

Dさんは、「彼女が自分で乗り越えると言うか、お母さんの方から言ってもらいよりもというふうに自然になっていくというのを待たらいいかなと思った。」

Iさんは、「ことに私の人生をすごく大事にしてくれているという感じがしたんですよ。」と語っている。

このように、アドラー心理学の思想には、例えば、「人々は仲間である」、「私には、能力がある」ということがあるが、Aさんの語りには、「人々は仲間である」ということが語りの言葉の中から理解できる。

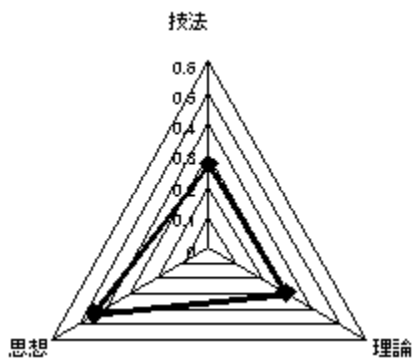


図37 Aさんの《要素》の分布

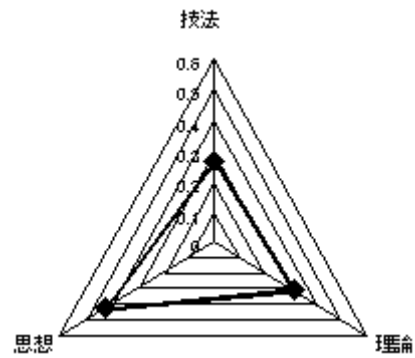


図38 Dさんの《要素》の分布

5. 考察

(1). 個性のあるインフォーマントの共通性

《相手》、《機能》、《要素》の3要素の各尺度から、それぞれの「個性のあるインフォーマント」について共通する特徴はないかを考察する。

《相手》の分布で、「自分優先」であった、Eさん、Qさんに共通している点は、今現在暮らしている状況が一人で暮らしているということと年代、性別が同じであることとアドラー心理学の学習状況が、カウンセラー養成講座を受講していることである。

「家族優先」であった、Oさん、Kさん、Lさんに共通している点は、家族と暮らしていることと、年代や性別が同じであることである。

「人々優先」であった、Bさん、Tさんに共通している点は、仕事として、人に関わる仕事をしていることと、住んでいる地方が同じであることである。

以上のことから、《相手》の分布では、現在のおかれている状況が大きく語りに影響しているといえることができる。しかしながら、家族と一緒に暮らしているインフォーマントが、必ずしも「家族優先」ではないのである。

次に、《機能》の分布であるが、「思考優先」であったBさん、Qさん、Cさん、Yさん、Zさん、Xさんに共通している点は、先の結果でも示したように、語りの中に考えが多くあるということである。

「感情優先」Fさん、Rさん、Dさんに共通している点は、特にはなかった。

「行為優先」BBさん、Uさん、Nさん、Vさん、CCさんに共通している点は、性別が同じことや行動を重視していることである。

このようなことから、《機能の分布》では、個人のライフスタイルと関係しているといえることができる。

《要素》の分布であるが、「技法優先」であったBさん、Iさんに共通している点は、家族と暮らしていること、性別が同じであること、人にかかわる健康に関する仕事をしていること、アドラー心理学カウンセラー資格者であることである。

「理論優先」であったAAさん、Xさん、Tさん、Vさん、Uさん、Zさんに共通している点は、家族と暮らしていること、アドラー心理学を10年以上学習していることである。

「思想優先」であったAさん、Dさん、Iさんに共通している点は、家族と暮らしていること、同年代であること、アドラー心理学カウンセラー資格者である、人に関わる仕事をしていることである。

《要素》の分布では、ある程度アドラー心理学を深く長く学習したかどうかと関係しているといえることができる。つまり、アドラー心理学の熟練度が影響しているといえることができる。

(2). 個性のないインフォーマントの共通性

「個性のあるインフォーマント」の以外のインフォーマントを「個性のないインフォーマント」とする。では、その人たちに共通点はないかを考察をする。「個性のないインフォーマント」は、Gさん、Hさん、Jさん、Mさん、Pさん、Sさん、Wさん、DDさんである。

《相手》、《機能》、《要素》の分布結果のグラフから見ると、「個性のないインフォーマント」は、ほぼ、±1の中に入っていて、突出している尺度はないのである。性別、年齢、家族構成、アドラー心理学の熟練度などのその他の共通点は、認められなかった。

「個性のないインフォーマント」は、つまり、様々な《相手》に各《機能》について、各《要素》を使いながら、アドラー心理学を実践していると語っているということである。

(3). 《相手》の分布から

《相手》の分布から考察できることは、アドラー心理学を使う相手は、自分だけとか、家族だけとか、人々だけなどのある特定の相手に使っているということではなく、必ず複数の相手に使っているということである。また、全てのインフォーマントは自分に使っていた。

(4). 《機能》の分布から

《機能》の分布から考察できることの1点目は、《思考》の《機能》を使う、使わないについては、個人差が大変大きいということである。《感情》や《行為》は±2の範囲にみごとに全員入っているのに、《思考》は、±2の範囲に入りきれていないのである。

2点目は、《思考》と《行為》の関係性である。《思考》の《機能》を多く使っているインフォーマントは《行為》の《機能》を使う割合が少なく、反対に、《思考》の《機能》を使うのが少ないインフォーマントは、《行為》の《機能》を使うことが多いということである。

3点目は、《感情》の《機能》は、他の《機能》から比べると使っている割合が総じて低いということである。Xさんは、「感情的になることが少なくなった。いらないので。」と語っているし、Wさんも「確かに、怒りとか、悲しみとかいうものが、僕の意識で制御できなくて、起こってくるけれども、それをつかむか、つかまないかは、選べるんだ。」と語っているように、アドラー心理学を学んでいくと自分の感情が分かるようになり、それを使うか使わないかは、個人の主体性で選び取っていけるものだと思った。

(5). 《要素》の分布から

《要素》の分布から考察できることは、《技法》は、±1の範囲の中に22名、73%のインフォーマントが入っているということから、使っている割合は少ないけれども、ほとんどのインフォーマントが安定して、《技法》を使っているということである。

《理論》、《思想》も±2の範囲の中にほとんどのインフォーマントが入っていることから、安定して使っているということである。

このことから、《技法》だけであるとかそのような1つの尺度だけでアドラー心理学を実践しているのではないということが分かったのである。

6. おわりに

アルフレット・アドラーも「個性記述的」と語っているように、そこには一人一人の語りが確実にあった。アドラー心理学で学んだことを自分の物語に取り入れていて、個々の語りがあり、それを「思考優先」などと位置づけることはあっても、パターン化することはできないと思った。

また、アドラー心理学の《要素》の《技法》、《理論》、《思想》については、課題の分離であったり、目標の一致であったりというものが、それぞれの語りを通して語られていたのである。アドラー心理学を学んでいくと、自分の感情が動くことが見えてくるようになり、個々の変化として、日常生活の中で感情を使うことが少なくなったり、感情をどう使うのかということを考えるようになったりするのではないかとも思ったのである。

さらに、アドラー心理学を学んでいくと、自分に何ができるかということを考えて、行動することができるようになったり、あるいは、世の中がシンプルに見えてきたりするということなど、様々な世界がこの研究を通して見えてきたのである。

今回の面接の方法は、アドラー心理学学習者に対して私が、30分程度の話を聞くというもので

あった。このとき、話をするものと聞くもの（私）の関係性、その場の持っている雰囲気、録音をしているという状況であるなどの《要素》がその語りには、大きく関係していたと思うのである。それは、正しい語りとか良い語りというものではなくて、そのときにその人が語った語りであると思ったのである。だから、その語りは一人一人違っているし、私がなんとなく語りを聞いて得た印象や内容が、単なる感覚ではなく、目に見える数字となって表されているのが、三角形の個人の分布グラフである。それは、絶対的なものではなく、私の主観を通したのから得たデータであるが、聞いたときの印象を説明するには、分かりやすいものであった。しかし、今回の研究では、具体的な記述内容の検討まではいたらなかった。今後はさらに具体的な記述内容について、より踏み込んだ研究を計画している。

以上、アドラー心理学の学習者に対して、「アドラー心理学とは何か」ということを社会的ないし人類学的に調査して、日本のアドレリアンの社会集団の中で、どのようにアドラー心理学が受けとられているかを調査研究してきた。私にとって、今回の研究は、新しい視点の開拓でもあり、今までの学びの復習とも言える、得がたい学びの場であったように思う。このような貴重な機会をいただいたことに感謝して、本論を終了とする。

謝辞

本研究をここまで進めるにあたっては、たくさんの方々に多大なご協力をいただきました。快くインタビューをお引き受けくださった皆様に心より感謝申し上げます。

また、研究の開始から統計処理ならびに計算結果の解釈などについてご指導くださいました野田俊作先生に篤く感謝申し上げます。

そして、本研究を温かく見守ってくださったすべての方に感謝申し上げます。

引用文献

(1) 井原文子：自助グループの個性と構造 アドレリアン、239、2008

参考文献

- (1) アーサー・クライマン著：病の語り 慢性の病をめぐる臨床人類学 誠信書房
- (2) 齋藤清二、岸本寛史著：ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践 金剛出版
- (3) ウィヴィアン・バー著、田中一彦訳：社会的構築主義への招待—言説分析とは何か 川島書店
- (4) 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法(1) 現在の問題の語りなおし アドレリアン 21 (1)1-10、2007
- (5) 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法(2) アドレリアン 21 (2)113-125、2008
- (6) 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法(3) 考察 アドレリアン 21 (3)215-224、2008
- (7) 清野雅子：自助グループの構造と変容 アドレリアン 57、1-21、2008

更新履歴

2013年5月1日 アドレリアン掲載号より転載